らば、彼等は決して水を用ゐて洗濯をしない、甚だしきに至りては顔を洗ふときにも水中に手を浸すことをしない、必ず先づ口にふくんで之を手にうつし然る後に顔なり手なりを洗ふのである、こんな事は當時の旅行家の記するばかりではない、成吉思汗の制定にかゝる一種の法律の中にも明かにこのことを規定して、もし犯すものがあつたら嚴罰に處すると定めてある、そうしてひそかにでも、之を犯したものは雷に擊たれるものと信じて居る、さきにのべた様な雷電の多い地方のことであるから、常にその激烈なる現象に驚倒して之を畏れ、擊たれるものは水を瀆がした罰だとするに至つては頗ぶる面白いことであると思ふ、また外國からして蒙古の王に物を獻ずるときには、その使者は進物と一緒に一度必ず燃え立つて居る火の中を通らねばならぬので、これをしないものは決してその目的を達することの出來ないばかりか叛逆の志あるものとせられるのである、カルピニの如きは、現に之を強いられて、どう斷つても免されなかつたと云ふて居る、こんな奇習がまだ〳〵いくらもあるが茲には省くことにする、ともかくもこれらの事は皆さきに述べた様な彼等の信念から來たものらしいので水の如き重要清淨なものは漫だりに之を瀆がすことはできない、火の如き熾んなるものはあらゆる人間の行爲に打ち勝つと考へたことゝ思ふ、實際カルピニも此火の中を通る理由について蒙古人の語つたことをしるして「火は能く萬般の害惡を退くることが出來るからである」と傳へて居る、彼等の外圍の物象を崇拜した有様及びその觀念の大體は大概こんなことで知ることが出來ると思ふ。

次に述べて見たいのは彼等の死に對する考である、さきに云ふた様に彼等はあらゆる現象に生命を附與するのであるが、此死なる問題に就いても同様の考を持つて居たらしい、死はたゞ生の一方面であつて、尚ほ通常の人に等